

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



わが佐藤プロ畑の収穫物。おもちゃかぼちゃ。

(2006.8.23 大島撮影)

- ・ トランスコーカサス地方への農耕文化の波及

有村誠 (地球研)

- ・ Topics とうもろこし試食会

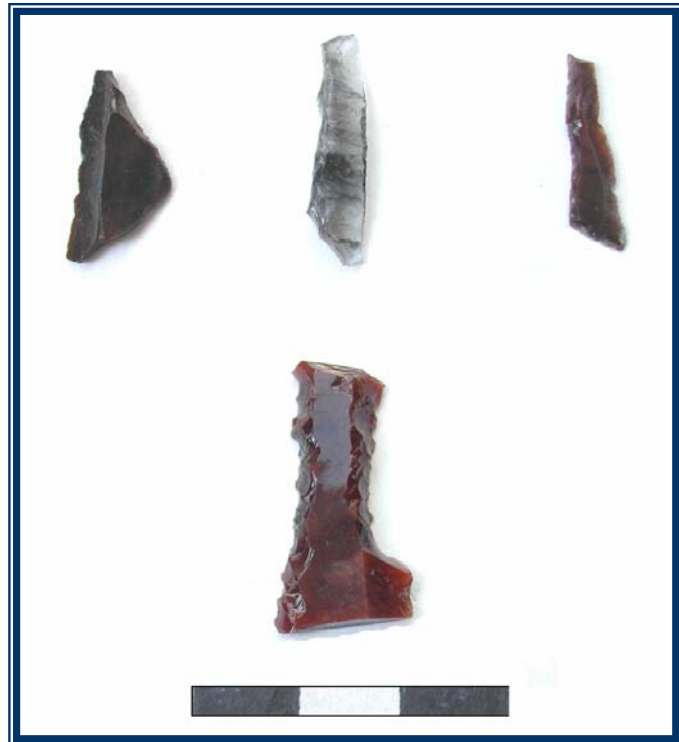
トランスコーカサス地方への農耕文化の波及

総合地球環境学研究所 有村 誠

私は、西アジアにおける初期農耕遺跡について考古学的な研究を進めてきた。今回は、この地域を少し北へ離れ、私が関わっているアルメニアの考古学調査について書いてみたい。アルメニアは、トランスコーカサス地方の国の一つだ。トランスコーカサス地方とは、コーカサス山脈の南側、黒海とカスピ海にはさまれた狭い地域の呼称である。この地域は、西アジアで生まれた農耕がヨーロッパに広がった際の“第一伝播地帯”の一つとして、その拡散のプロセスをみるのに興味深い。

私が参加しているのはフランス（リヨン地中海研究所）のアルメニア考古学プロジェクトで、トランスコーカサス地方の先史時代の解明を目的としている。今年も7月末に現地調査に参加する機会を得た。今回の私の目的は、カムロ（Kmllo）などいくつかの遺跡から出土した石器を分析すること、そして、アルメニアの初期農耕文化の様相について現時点での見通しをたてることであった。

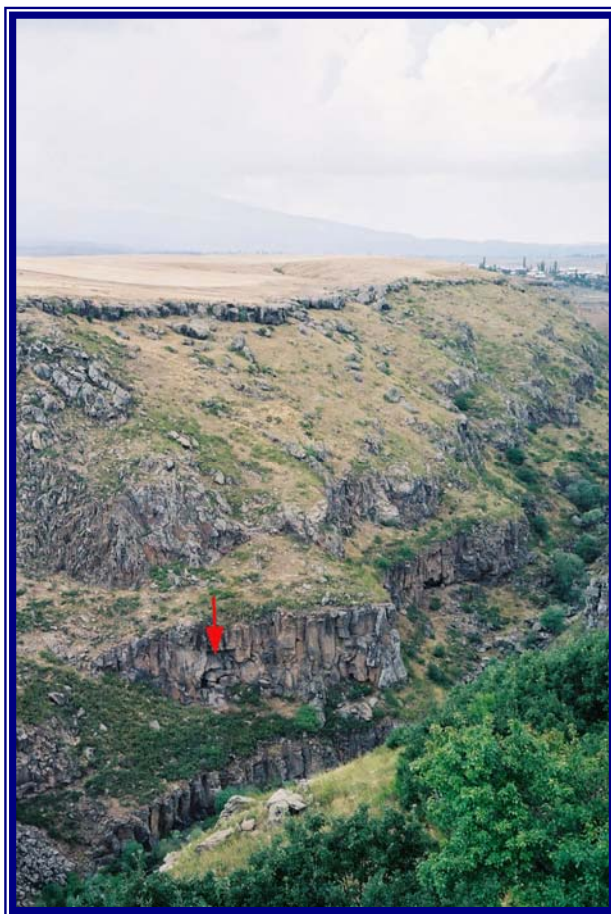
アルメニアを訪れるのは2度目で、いつも夏の盛りの7月だ。石器の分析は調査隊が借りている首都エレヴァンのアパートで行った。先史時代の研究をするものにとって、アルメニアはトルコと並んで、黒曜石（ガラス質火成岩）の産地として有名である。規則的に割れ、割るとするどい刃を得ることができる黒曜石は、石材として理想的だ。カムロ遺跡でも、石器のほとんどに在地の黒曜石が使われている。その代表的なものに、様々な形をしたいわゆる細石器（microliths）（写真1：カムロ遺跡出土黒曜石製石器：細石器（上）や、私たちがカムロ・トゥール



とカムロ・トゥール（下）

(Kmló Tool) とよぶ、刃の部分が丁寧に加工された石器がある (写真1)。

カムロ遺跡は、エレヴァンの北 40 km、溪谷にある岩陰遺跡で (写真2)、2003 年から 3 年かけて発掘調査された。中の広さは4ないし 5 m²程度と小さい。石器の他に、川魚やヒツジ・ヤギ (おそらく家畜種) などの動物骨が出土している。また、コムギやオオムギが数多く出ている地点があるが、これは上の中世の層から混入した疑いがある。今後、穀物そのものの年代測定が必要だろう。カムロ遺跡は、出土した炭化材のC14 年代測定によれば、紀元前 5500 年ころの遺跡とされる。さて、この遺跡の性格だが、未だ議論はあるが、狩猟や放牧の際に短期居住されたキャンプサイトであったと考えている。住んでいたのは、家畜種が存在することや石器の型式から考えて、新石器時代人 (初期農耕牧畜民) だろう。



(写真2 : カムロ遺跡 : 遺跡は矢印の下の岩陰)



少し調査以外の、私の見聞きしたアルメニアのことも書いてみよう。アルメニアは日本にあまりなじみのない国だろう。私も調査に参加するまで、ほとんどこの国のことは知らなかった。エレヴァンは、アルメニアで唯一都市とよべるような人口が集中した街である。10階建てくらいの、旧共産圏様式とも

(写真3 : エレヴァンのアパート群 : 古いアパートでは、最上階が付け足されてるのをよく見る。)

言えるような飾り気のないアパートが建ち並んでいる。地震がくればひとたまりもなさそうなブロックを積み上げただけのアパートが気になる（実際、この辺りは地震の多いところだ。写真3）。今のアルメニア共和国は、1991年にソビエト連邦の解体とともに独立してできた。公用語はアルメニア語。でも、ほとんどの人が母国語とおなじくらいロシア語を話す。反対に英語を話す人は、レストランのウェイターにもほとんどいない。観光地としては、アルメニアはほとんど知られていない国だ。実際に外国人観光客をほとんど見ない。人心はおだやかで優しい、と書きたいところだが、正直なところアルメニア人は愛想がないと思う。私たち外国人に対し慣れていないというのがその理由の第一なのだろうが、町中でも人々が挨拶をかわしたり、にこやかに談笑しているという風景をあまりみない。西アジアのアラブ諸国を訪れると、もの珍しいせいかわ私たちが外国人に、どこでも子供がいやになるくらいちょっかいをかけてくる。しかしアルメニアでは、赤ちゃんをのぞいて子供に近寄られたことはない。同僚のフランス人が、アルメニア人は冷たいとつねにこぼしていたが、分からなくもない。何か歴史的・政治的な要因が、このアルメニア人の表面的な冷たさの背景にありそうだ。

隣国トルコとは、アルメニア人虐殺問題（特に第一次大戦中の事件）の認識をめぐって政治的に緊張状態が続いている。また、EU加盟を目指すトルコにとって、EU側から改善がもとめられている人権問題ともからみあい、早々に解決策を見いださないといけない問題にもなっている。不仲の二国ではあるが、トルコ人とアルメニア人は文化的にきわめて近いと感じる。トルコも発掘調査を通じて知っているが、はじめてアルメニア語を聞いたときはトルコ語かと思った（もちろん言語学的にはちがうのだが）。驚くまでもないかもしれないが、人々の顔つきも似ている。そして、予想通り食べ物も。歴史的に見ても、両国はしばしば同じ国としてなりたっていたこともあるし、密接な関係にあった。

こういう歴史的・文化的な背景を鑑みたとき、最初の農耕文化がトルコを経由してアルメニアに入ったと考えるのは、そう無理な想像ではないだろう。実際、私たちが発掘したカムロ遺跡の石器は、トルコ東部の新石器文化のものに類似している。まだまだ、私たちが手にしている情報は断片的ではあるが、トランスコーカサス地方に西アジアから農耕文化が波及してきたのは紀元前6000年から5000年頃だと思う。その経路としては、考古遺物の類似、そして後の歴史上の展開から考えてみても、トルコ東部を通してだろう。農耕経済がどのようにして伝わったのか、という点については不明だ。ヨーロッパの例にあるようによそから農民が移住してきたのか、それとも地元の狩猟採集民が農耕という新技術を受容したのか。仮説は多く、発掘によって得られた情報を吟味してこれから判断していかなくてはならないだろう。答えは簡単にはでないが、この過程がほんとうに楽しい。

Topics

<とうもろこし試食会>

佐藤7口の畑は、収穫物が続々出てきています。

おもちゃかぼちゃに引き続き、とうもろこしがお目見えしました。

みんなで試食会？です。

とはいえ、シリア出張者や実験中の人やお休みの人もいて食べたのはこのお3人と大島だけでした。そのままでも十分甘くておいしいとうもろこし。自然の恵みを実感！です。

